

本当の国際化とは

広島県 三次市立布野中学校 2年 丸川海音

最近のニュース番組を見ていて、とてもショックを受けたものがあった。それは、「ヘイトスピーチ」と呼ばれるものだ。「ネトウヨ」と言われる急進派右翼による在日韓国・朝鮮人を罵倒するデモのことだそうだ。数百人規模のデモ隊が、聞くに堪えない罵詈雑言を叫んで都心を行進していた。この日本でこんな事が起こっているなんて、とても信じられなかった。それまでも、中国や韓国の反日デモをニュースで見る機会があった。踏みつけられる顔写真や引き裂かれる日本の旗を見て、「なぜこんなことを！」と怒りを感じた。しかし、ヘイトスピーチを見た時感じたのは「やめてほしい」という悲しみだった。

その時、二年前のある出来事が脳裏に浮かんだ。それは、多くの客で混雑するコンビニエンスストアでの出来事だ。突然の怒鳴り声に、店を出ようとした僕の足は止まった。

「うるさい！ どうせ店のことなんかわかってないんだろう。外国人は黙っておけ！」

怒鳴られていた店員さんには見覚えがあった。外見からは日本人としか思えなかったが、少したどたどしい日本語から察すると、外国の人だったのだろう。これまでに何度か対応してもらった店員さんだったが、僕が落とした釣り銭を嫌な顔一つせず拾ってくれ、丁寧な対応で感じのいい人だった。そんな店員さんが、若いスーツ姿の男性客に怒鳴られていた。他の客の会話を小耳にはさむと、商品が品切れだったらしい。明らかに店員さんの過失ではない。怒鳴り散らした男性客が憤然と店を出て行った後、僕も呆然として店を出た。その騒動のさなか、何もなかったように店を出て行く客も多かった。

帰宅後、やっと我に返り考えてみた。男性客は、他の日本人の店員でも同じように怒鳴ったのだろうか。店員さんの名札を見て、「外国人は…」という言葉が出たのだろうか。一生懸命説明しようとする店員さんに対して、「黙っておけ」という態度は、外国人だから説明なんてできない、と決めつけていたからだろうか。そして、店員さんに非がないのは明らかなのに、他の客は、皆、無関心で、さっさと店を出て行ってしまったという、後味の悪い思いは何なのだろう。

うか。

そのときふと、自分はどうだったのか、ということに気づいた。自分だって、ただの傍観者だった。そして、今平気な顔をして買って帰ったジュースを飲んでいる。子供だから何も出来るわけがない、と考えていていいのだろうか。責められ、罵られていた店員さんから見れば、あの男性客に何も言えない、無様な日本人の一人として映ったに違いない。

その後の店員さんがどうなったのかはわからないが、数日後、その店に出かけた時には姿はみえなかった。そしてその後、その店員さんを見かけたことは一度もない。

この出来事は、あの男性客も、その場にいた客も思い出すことはきっとないのだろう。僕自身も、今回のニュースを見るまでは、記憶の片隅に追いやられていた出来事だった。でもあの店員さんはどうだろう。一生その人の心の傷として残り続けているのではないだろうか。そしてもしかしたら、罵倒した日本人や、何の関心も示さなかった日本人に対して、嫌悪感を抱いて生きているのではないだろうか。もし、あの時、誰かがあの人をかばう発言をしていたら、誰かと言わず、僕がそういう行動をとっていたら、あの人日本人への感情は変わっていたのではないだろうか。

ヘイトスピーチをする人や、反日デモ隊の人たちが、どんな気持ちなのかは、僕には想像することはできない。歴史の勉強をしっかりと見ないと、様々な思想があることもわからないと思う。

しかし、今の僕にもはっきりとわかることがある。それは、罵られ、軽蔑の対象となっている人達に、何ら罪はないということだ。一人一人の人間の尊厳は、生まれた国が違って何物も変わることはないはずだ。同じ人間として、命の重さは同じであり、差別されていい人間などいないはずだ。

これから僕は、小さな町での生活から、少しずつ広い世界へとコミュニティを広げていく。その中で、様々な国の人と出会うだろうし、様々な考え方の人と出会うだろう。そのときに、偏った価値感や、国籍などの情報にとらわれることなく、同じ人間として、その人の内面をとらえることのできる幅広い心の持ち主でありたいと思う。二年前のあの時店員さんを救えなかった僕が、ここに本当の国際化とは何かを考え、行動できる大人に成長していくことを決意したい。

視聴のポイント

本作文は、外国人に対するヘイトスピーチの問題と、作者の身近に起こった事件を関連付けて考察しています。

作文中において、作者がニュース番組で見聞きしているような、特定の民族や国籍の人々を排斥する言動は、人々に不安感や嫌悪感を与えるだけでなく、人としての尊厳を傷つけたり、差別意識を生じさせる恐れがあり、容認できるものではありません。

私たち一人一人が、外国人に対する態度について考えるとともに、文化等の違いや多様性を認めて尊重し、外国人に対する偏見や差別をなくしていく必要があります。

作者が結びで述べているように、偏った価値観や、国籍などの情報にとらわれることなく、同じ人間としてその人の内面をとらえ、互いの人権を尊重し合う社会を共に築いていきましょう。



考えてみよう

- 男性客は、店員さんが日本人だったとしても、同じように怒鳴ったのだろうか？
- 男性客をとがめたり、店員さんをかばう人が誰もいなかった理由
- 怒鳴られた店員さんが姿を見せなくなった理由

NO!と言える強い心をもつ

～ハンセン病問題から学んだこと～

広島県 学校法人^{えいしん}盈進学園盈進中学校 1年 ^{ことらみず}後藤泉稀

1・金さん、絶対また来ます

瀬戸内海の小島にある岡山県の長島愛生園。そこに、金泰九（キム・テグ）さんという元ハンセン病患者の方が暮らしている。私の所属しているボランティアと人権・平和を研究するクラブは、金さんと17年間交流し、学習を続けている。私は先日初めて金さんとお会いし、交流させていただいた。

先輩方に「金さんってどんな人ですか」と質問したら、必ず同じ答えが返ってくる。「やさしくて、笑顔が素敵な人だよ。」実際、私も金さんの笑顔に包まれてとても幸せだった。でも、金さんの表情がきりっとすることもあった。「差別や偏見をなくすために私たちに望むことは何ですか。」その質問に、金さんはいつもこう答える。「正しく知って、正しく行動する。」これまで、社会の厳しい差別と偏見の中で生きてきた人の答えなのだと思う。

みんなが金さんの不思議な魔法にかけられたように、自然と笑顔を浮かべていた。「先輩方が言っていたことってこれのことなんだ。」私もいつの間にか、金さんのことが大好きになっていた。そして、金さんにまた会いたい！あたたかさに触れたい！と強く思った。

2・忘れない、あの時の苦しみ

「らい予防法。」それは金さんを含め、多くのハンセン病患者を苦しめた終生絶対隔離法。「ハンセン病になった。」それだけで家族やふるさとを奪われた。子どもは学校で、兄弟姉妹までもいじめられた。発病し、収容されると家族やふるさとに帰ることが許されないのだ。金さんは語る。「大阪に残してきた妻が亡くなくても帰してもらえなかった。それが一番辛かったなあ。」その時私の頭には、大好きな家族の顔が浮かんだ。どうして大事な家族と一生別れなければならなかったのか…。胸がぎゅっと苦しくなった。こんなにも苦しい思いをした人がいたことを私は知らなかったのだ。今、そのことを学習した私は、この過去を深く胸に刻み、忘れず、私たちが後世に伝えていかなくてはならないと決意した。

3・いじめSTOP～私がやるべきこと～

ハンセン病になった人は差別や偏見に苦しみ傷ついてきた。では、そんな人は、現在いないのか。いや、今の時代にもあることだ。「い

じめ。」これも許されない差別。私はいじめによって、自ら命を絶った人がいるというニュースを聞くにつけ、私にも無関係なことではないと思う。人を無視する、悪口を言う。これらがいつかいじめになり、人の命を奪ってしまうことにつながると思う。

私は周りに流される性格だ。やってはいけないと分かってはいるが、なかなか自分でストップをかけられない。しかし、このままだと私が人を傷つけてしまう。だから、自分にも友達にもNO！と言える真の勇気を持たなければならないと思う。ちょっとした悪口、間違った知識や行動が差別を生むのだから。

私は、そう考えてハンセン病問題を考えてみた。差別を広げたのは、「らい予防法」をつくった国が、「ハンセン病は恐ろしい病気。」と間違った宣伝をしたからだ。例えば、患者が歩いた後は、消毒で真っ白にする。それを見た人は「恐ろしい病気」と思ってしまう。周りの人は鼻をつまんで歩く。好きで病気になったわけではない。それなのに、犯罪者のように扱われた。こうして差別はつくられた。

しかし、私は、差別した責任は国だけではないと思う。市民が、国の間違った情報を信じ、自らに差別を宿したからだ。当時の人たちは、それに気がつくことなく差別を続けたから、あのような悲しい出来事が起きてしまったのだ。間違った情報はとても怖く、恐ろしい。また、社会の差別をなくすことはとても難しく、私一人では出来ないことだと思う。しかし、まず「自分から行動する」ということが大事だ。だから私はまず、いじめの入り口である人の悪口をなくすことから始める。

4・人と人をつなぐもの～私の決意～

私は小学校の時、先生に「人間が生きるために絶対に必要なもの」を教えられた。夢？希望？色々考えた。しかし先生は、「もっと大事なものだよ」と繰り返した。やっと先生の口から出てきた言葉。それはたった一字。「愛」だった。先生がこんな話をしてくれた。

「人はね、他者から愛をもらわないと生きていけないのだよ。」そうか…。私が今を生きられるのは、多くの人から愛をたくさんもらい、支えられているからなのだ。目には見えないけど、確かに愛をもらったという時は何かを感じる。ほっとしたあたたかい何かを。

そうか。金さんの部屋で、そこにいたみんなが笑顔になったのは、金さんの私たちへの愛があったからなのだろう。金さんが言っていた。「こうやって、みんなが会いに来てくれるから幸せだよ。」これが、金さんの愛だったに違いない。私も、金さんのように、たくさんの人と愛でつながる人間になりたいと思った。そのために、周りに流されず、自らの意思でNO！と言えるようになると決意した。

視聴のポイント

この作文では、クラブ活動で元ハンセン病患者の方と交流することになった作者が、元患者の方の愛情や優しさにふれて感動するとともに、今まで社会から厳しい差別や偏見の目を向けられてきたという事実を知ります。また、学校生活においても、いじめという名の差別が存在しており、この2つの問題は根底では同じであることに気づきます。そこで、自らの意思でいじめや差別にNO！と言えるようになると決意します。

差別をなくすためには何が必要でしょうか。元患者の方は、作文中で、「正しく知って、正しく行動する。」ことだと答えています。

ハンセン病患者・元患者やその家族の方々が偏見や差別で苦しむことがないよう、正しい知識と理解が求められています。



知っておこう

●ハンセン病とは

- ・細菌による感染症
- ・感染したとしても発病することは極めてまれ
- ・発病しても、早期に発見して適切に治療すれば後遺症も残らない
- ・患者・元患者の方は差別や偏見に苦しんできた

考えてみよう

- 差別や偏見をなくすためには何ができるだろう？

審査員長からのメッセージ

全国中学生人権作文コンテスト中央大会審査委員長

(作家) おちあいけいこ 落合恵子



こんにちは 落合恵子です。長い間 中学生の方々がお書きになった作文の選考に関わってきました。

“選考”などという言葉が恥ずかしくなるほどそれぞれの作品からいろんなことを教えていただけてきたと思います。私も人権についてのさまざまな本を書いたり、あるいは活動をしていますが、ときどき“人権ってなあに？”という原点に戻ることがあります。

私は自分に“人権とは”という言葉で問い直しをします。これは私の勝手な解釈ですが、私自身は人権とは“誰の足も踏まないこと”同時に 人権とは“誰にも自分の足を踏ませないこと”その約束と実行の上に花開くものだと思っています。この場合の“足”とは具体的な足ではなく、その人自身あるいはちょっと難しい言葉かもしれませんが、“その人の尊厳”というふうに言葉を変えることも可能かもしれません。

ちょっと考えてみてください。“私は僕は今まで誰にも足を踏まれたことはなかったか”同時に“私は僕は今まで一度も誰の足を踏んだこともなかったか”あるいは“踏まれたことがなかったか”これをちょっと考えましょう。私自身考えます。足 踏まれたこと・・・あったよな。同時にたぶん十分に知らずに、あるいは中途半端にしか知らされていないというその結果において、誰かの足を踏んでしまったこともあったと思います。

人権を軸に考えると1人の人間の中に“被害性”足を踏まれる側の自分と“加害性”誰かの足を踏んでしまう自分がある。そのことをしっかり考えていきたいと思います。

中学生の方々の作品に出会うたびになんて深くて豊かなのだろうと考えます。こんな一人ひとりの人が大人になってくれたら、この社会から全ての差別は消えるはずだと思うような作品がたくさんあります。それでも現実に私たちが社会を見回してみるとまだ、ここにも、あそこにも、そこにも差別はある。あるいは“区別”という名前に変えた、でも、足を踏んでしまう瞬間があったりする。気付かされます。

30何回目もこのコンテストがあるとお聞きしましたが、ということは最初15歳で作文を書かれた方はまもなく50代になられるのかもしれませんがね。

中学生の作文はそのまま、この社会を形作っている私たち大人一人ひとりへの問いかけであるという言い方ができるかもしれません。

“差別なんてなくなんないよ”というあの冷めた言い方も社会には少なからずあるような気がします。でも私は信じます。差別を作ってきたのが一人ひとりの人間であるならば、そして差別を作ったものを再生産してきたのが私たち一人ひとりの人間であるならば、それをなくすことができるのも私たち一人ひとりであると。

もう一度自分に聞きましょう。“私は誰かの足を踏んだことはありますか？”
“私は誰かから足を踏まれたことがありますか？”人権とはあなたがあなたを十分に生きること。私が私を十分に生きること。そこに花開くものです。もちろん平和であること。これも人権の大事な、そう、欠くことのできない条件であるかもしれません。

人権を遠くの額の中にいれなくて、自分に引き寄せて“私は？”と考えるときから人権はより生き生きした本当に呼吸をするものになってくれるものではないかと思っています。

朗読者紹介

はま だ たつ おみ
濱田龍臣 (俳優)

2006年に子役としてデビュー。
大河ドラマ『龍馬伝』で坂本龍馬（福山雅治）の幼少役や、実写版『怪物くん』で市川ヒロシ役、映画『ガッチャマン』で甚平役を演じる。
2010年10月「ゴールド ドリーム アワード 2010」で、金の卵賞を受賞。



おお わ だ な な
大和田南那 (AKB48)

AKB48 チームBのメンバー。
主演を務めたドラマ『セーラーゾンビ』（テレビ東京系）や、ミュージカル『AKB49 ～恋愛禁止条例～』での透明感あふれる演技で存在感を示す。AKB48の次世代エースとして、これからの活躍が最も期待されている注目株の一人。

審査員長紹介

全国中学生人権作文コンテスト

中央大会審査員長 (作家) おち あい けい こ
落合恵子

(株)文化放送アナウンサーを経て作家活動に入る。家族の問題、社会的な問題、教育問題、環境問題などを、誰にとっても、わかりやすく考えられる「社会に共通な問題」としていくことに努め、小説の形で表現し続ける。また、女性問題や子どもの人権問題を世界に共通するテーマとしての視点で講演している。執筆、講演活動だけでなく、子どもの本の専門店「クレヨンハウス」と、女性の本の専門店「ミズ・クレヨンハウス」を主宰。



法務局・地方法務局 人権相談窓口

みんなの人権 110 番 (全国共通)

 ゼロゼロみんなの ひゃくとおぼん
0570-003-110

子どもの人権 110 番 (全国共通・通話料無料)

 ゼロゼロ ななの ひゃくとおぼん
0120-007-110

女性の人権ホットライン (全国共通)

 ゼロ ナナゼロの ハートライン
0570-070-810

- 一部の IP 電話からは接続できません。
- 受付時間 平日午前 8 時 30 分から午後 5 時 15 分まで

インターネット人権相談受付窓口 24 時間 365 日相談を受け付けています。

インターネット人権相談 **検索**



人権ライブラリー

人権に関する資料や映像作品を借りたい方、お探しの方、人権に関する視察・研修や打合せスペース（無料会議室）をお探しの方は、人権ライブラリーをご活用ください。遠方の方でも、郵送等による貸出しを行っています。詳細は下記までお問合せいただくか、人権ライブラリーのホームページをご参照ください。

人権ライブラリー ※公益財団法人 人権教育啓発推進センター併設

〒105-0012 東京都港区芝大門 2-10-12 KDX 芝大門ビル 4F

TEL : 03-5777-1919 FAX : 03-5777-1954

Eメール library@jinken.or.jp

ホームページ **<http://www.jinken-library.jp/>**

開館時間 午前 9 時 30 分から午後 5 時 30 分まで（土日、祝日、年末年始は休館）

人権ライブラリー **検索**

※この人権啓発ビデオは、動画共有サイト YouTube の法務省チャンネルで視聴可能です。

法務省チャンネル **検索**